ライフヒストリー論についての覚書

鳥　越　皓　之

本論は，もともと拙著『沖縄ハワイ移民一世の記録』(中公新書) 1988年，に収録するために執筆したものである。ただ編集の最終段階で，新書という一般的な本の性格からして，このような論は，はぶいた方がよいだろうと判断し，割愛したものである。そのため，本稿はしばらく框底に眠っていた。しかしこのまま眠らせておくのも忍び難い気もし，このように活字にして残しておくことを考えた。

本論は，今回少しの修正をしたとはいえ，新書むきに執筆したため，学術論文のような厳密な記述方法をとっていない。また独創性においても乏しい。ただ粗雑ながら，方法論についての主張がかなり明確に述べられているとおもう。本稿で採るべきことは，ライフヒストリー論についてのまとめ的な紹介と，その主張であろう。

一　ライフヒストリーの成立

ライフヒストリーとノンフィクション　世間には流行り（はやり）という現象がある。そもそも人間にとって，流行りとはどういうものなんだろう。おそらく，繰り返しの生活のなかで新鮮なもの，それが流行りなのだろう。細いネクタイが急に太くなると，たいへん新鮮に感じる。

社会科学のなかにも流行りがある。マルクス主義というイデオロギーが流行った時期があるし，構造主義という分析方法が流行ったこともある。記号論・象徴論は最近の流行りである。ライフヒストリーも，社会学の分野での最近の流行りのひとつである。既成の社会学の理論や実証的な論文のなかにあって，ライフヒストリーは新鮮にうつる。もっともあたらしいものがつねにそうであるように，ライフヒストリーは社会学のなかで，かなり不安定な位置をしめている。

ライフヒストリーは，Life の History という意味で，人の一生を聞き取って，それを記録する手法である。つまり，調査者が，ある話者をみつけ，その人の一生の間に起こったさまざまなことを聞き，それを記録するのである。人によっては，波乱万丈の生涯を送った人もいるし，また逆に，淡々とした生涯を慎ましく送った人もいる。それぞれが，それぞれの生涯である。ただ，社会科学者のばあい，ノンフィクションライターの多くがそうであるような，いわゆる事件をもった，つまりは，波乱万丈であることが多いそのような人物を意図的に追いかけるわけではない。

たとえば，ノンフィクションライター，沢木耕太郎のすぐれた作品『テロルの決算』は，社会党委員長，浅沼稲次郎と，かれを刺殺した山口二矢を，追いかけている。「人間機関車と呼ばれ，演説百姓とも囃されたひとりの政治家が，一本の短刀によってその命を奪われた」というこの作品の出だしが，すでに事件を追っていることを，明瞭に示している。このような事件性をもつ対象を追いかけるのが，ノンフィクション作品の正道であろう。もっとも，事件といっても幅がひろい。人を殺すというような犯罪もそうだが，「からゆきさん」という海外売春婦も歴史的事件だろうし，水俣公害のような社会的事件も含まれよう。

それにたいし，社会学のライフヒストリーは，“事件”ではなく“生活”を追いかけている。なぜ生活を追いかけるのかという点については，すぐあとで述べることにしよう。ただ，淡々と生涯を送った生活者も，その人にとっては，夫や子供との離別，失業，大金持ちになるというような，個人にとっての事件をもっている。またそれを，観察者によって，社会的事件として読み換えることもできないわけではない。そのため，ライフヒストリーの作品と，ノンフィクションの作品との

間に区別がつかないことが，実際は少なくない。またそのような明確な区別をする必然性もない。ただ，その追いかけるもの，ねらい，は両者のあいだでは異なっている。

社会科学と人間　ここで社会科学の特性をみておこう。社会科学という用語は十九世紀の中葉に誕生しており，その歴史は浅い。この“科学”という表現には，中世までの社会についての形而上学的思弁とは，明瞭に区別される“実証的・経験的な理論”というおもいが込められている。それは個々の人間の働きとは独立した，社会事象についての“客観的な法則”をあきらかにする学問と一般には受け取られている。

それはふつう命題のかたちで表示される。たとえば，「社会的凝集性が高いほど，自殺率は低くなる」（デュルケーム）というがごときものである。

この客観的な法則という側面をとらえて，経済学者の内田義彦氏は，つぎのように批判的意見を述べている。「そのこと自体は社会科学の性格として正しいのでありますけれども，社会科学という言葉をきくと，そういう側面だけが表に出てまいりまして，その社会科学を使っておのがじし社会を見，社会に働きかけてゆく人間とか，さらには社会科学そのものをこれまたおのがじし作りあげてゆく人間とか，主体としての人間の作業が思い浮ばない。認識されたものというふうに受身になって認識主体としての人間が消える。また人間が，社会を認識しつつある場というよりは，社会認識の結果を，つまり，作業の現場ではなくて作業の終ったあとを完了形で思い出させる。お前はどう思うか知らんが社会科学ではこうなっているという形ですね。進行形ではない。そういう響きを社会科学という言葉は持っていると思うんです」。

これを私の関心に引きよせてまとめれば，社会科学的な客観的法則や認識という不動の真理が，実際にはあるわけではない。社会事象を認識しようとする人間の営為——暫定的認識——があり，それこそが社会科学のありようという側面もあるのではないか，ということであろう。

社会に働きかけていく人間，社会で生きていく人間，という，いわば社会科学における“人間の呼びもどし”の主張が，そこにあると私は感じるのである。この社会科学における人間の呼びもどし，という主張は，内田にかぎらず，近年，少なくない数の社会科学者のあいだに見られる主張であるように，私は受けとっている。

「生活」を研究する　じつはこのような主張を身を持って痛感したグループは，社会学でみれば，フィールドワークをしているいわゆる“現場”の社会学者であったようにおもう。かれらはその痛感に基づいた論理構成の機軸に「生活」という概念を打ち立てた。これは「社会」という概念と微妙に重なるようにみえつつ，やはり本質的に異なる概念である。

周知のように，「社会」という用語はSocietyなどのヨーロッパ語に対応するための翻訳造語である。日本において伝統的に使われてきた言葉ではない。Societyを伝統的日常語に近い言葉で言い換えれば，「世間」という言葉にかなり近い。それと同じ水準の言葉に「生活」を言い換えれば，「世わたり」という言葉になろうか。つまり“わたる”という“働きかけ”の側面がここで言う意味での「生活」にはあるのである。人間が社会のなかで生きていくことを研究するこの生活研究の方法として，社会学では生活構造論やライフヒストリー（生活史）論が誕生したのである。

ただこの日本固有とおもわれる「生活論」研究は，ヨーロッパ語に「生活」に対応する言葉がないために，輸出困難な論理，という問題点をもっている。社会学で使用している「生活」という概念は日常で人びとが使用している「生活」という言葉の意味とさほど違わない。この「生活」は，たとえば英語でいうと，Lifeだろうか。それとも，Livingだろうか，あるいはLivlihoodだろうか。これはどれも正しく，どれもまちがっている。そのときの文脈でそのうちのどれかが正しいのである。

これとよく似た例は，「主体性」という概念である。「主体性論争」は日本の社会科学では大きな問題となり，かなりの論理のふかみをもつ。この「主体性論争」を研究しているアメリカ人の日本研究者と私は話をしたことがある。かれはこの「主体性」という日本語をひとつの英語に翻訳で

きないために，論理が分散して，その論理をうまく英語圏の人に伝えられないと残念がっていた。文脈によって，Identity といったり，Ego といったり，さまざまな言葉がでてくるからである。日本が「社会」という翻訳造語をつくったように，「生活」についての英語の翻訳造語をつくらないかぎり，このようなことは避けられない。「生活」という概念はこのような問題点をもっている。しかしこの事実は，逆に生活論が，輸入論理ではなく，日本固有の必然から生れた論理であることを示している。

ライフヒストリー研究は，この生活研究への継続的な関心，その蓄積を基盤として登場したものである。そのことは，生活に焦点をおいた研究業績をすでに持っていた研究者たちによって，ライフヒストリー研究が着手された事実からも窺い知ることができる。たんに人の一生がおもしろいから，という素朴な関心だけから起こったものではない。

当初，ライフヒストリーという呼び方ではなくて，「生活史」という呼び名が一般的であったと記憶する。「生活」への関心という成立事情からして，それは当然であった。その後，「生活史」に代わり，欧米でも使用されるライフヒストリーという用語がよく使われるようになってきた。だが，そのばあい，このライフという意味は，日本語の「生活」とほとんど同意語で使用されているようだ。英語の Life より広いのである。

二　ライフヒストリーの論理

ライフヒストリーとの出会い　日本以外にも視野をひろげて，ライフヒストリーの位置づけをしておこう。

社会科学とライフヒストリーとの関係は，自然科学と技術との関係に似ている。歴史をふりかえって見ると，理学や工学などの自然科学が成立してはじめて，技術が成立したのではないことに気づく。太古よりたいへん長い技術の発展の歴史があった。そのある段階で，自然科学が既成の技術に関与しはじめ，その結果，技術を洗練させ，それを論理づけた。

一方，私たちは，誰かが誰かの一生について，あるいは，一生のある部分について，書き記した記録を，かなり古い時代からもっている。それは一般に生活記録や伝記とよばれている。我が国でみても，江戸時代の後半期になると，村里や離れ小島でさえ，このような生活記録や伝記を書く人をみつけることができるようになった。一般庶民に文字を扱える者が増えたためである。ヨーロッパでももちろん生活記録や伝記（biography）を書くながい歴史をもっていた。

この生活記録や伝記の伝統が，ある段階で社会科学にでくわすのである。すなわち，自然科学が技術を案出したのではないのと同じように，社会科学が，ライフヒストリーを案出したのではないのである。社会科学が生活記録や伝記にでくわして，それを社会科学の視点から方向づけようとしたにすぎない。

ライフヒストリーの社会調査への導入　現在，「社会調査」といえば，社会学の専売特許のようになっている。大学のカリキュラムでも，社会学科で「社会調査」の講義が行なわれているのがふつうである。この社会科学としての「社会調査」の成立と，生活記録や伝記とがかかわっている。

世の中が，十九世紀から二十世紀に変ろうとするころ，イギリスでの最大の問題とされていたのは，労働者の貧困の問題であった。有名な著作でいえば，ちょうどマルクスの資本論全三巻が刊行されたころである。そのころ，貧しい労働者の生活実体についての，見聞きを書いた本や記事がよく出版され，それが，多くの人びとの心を，社会改良，すなわち労働者の生活改善，の方向へ向わせていたようである。

一方，そのような「聞き書き」にあきたりず，より“客観的”な調査をおこなう人びとがでてくる。チャールス・ブースは数量的，統計的手法を用いてロンドンのイースト・エンド地域の住民の労働と生活を分析している。さらにそれを受けて，類似の手法を使ってシーボーン・ロウンチュリーがヨーク市の労働者の貧困調査をおこなっている。

社会学者，イーストホープは，ブースの業績として評価すべき点として，次のことを指摘している。すなわち，それまで貧困というものの原因を，

個人の怠惰に帰する趨勢があった。それにたいし，ブースは，貧困を個人の側からではなく，社会の側から説明する必要性をあきらかにした。その点を評価すべきであるといっている。

ブースがそれまでの常識であった「個人の怠惰論」を覆せたのは，その貧困を形成する客観的な諸条件を提示するその方法論とふかく関連している。「聞き取り」はどうしても個人の側から，対象を分析しがちである。結果として，個人の性格や個人が置かれている条件に目を向けることになる。それにたいし，数量的，統計的調査法は，傾向として，社会的諸条件の側から対象を見ることになるのである。

このようにみてくると，社会調査は，素朴な「聞き取り」から，統計調査法への進歩として理解されてしまうかもしれない。つまり，個人の側からみるライフヒストリー的手法の否定の方向である。

たしかに，ブース自身も，自分の調査ノートは，センセーショナルな物語の資料で一杯である。けれども自分は「聞き書き」の手法を用いないで，数量的手法を用いて，一般的な社会状況を記述するのだといっている。客観的で統計的な調査法の幕開けとして，これ自体はすばらしいことである。

けれども，戸田や甲田が指摘するように，「このようにブースはみずからの調査に用いられた統計的取り扱いを大いに強調してはいるが，しかしこれらの調査を画期的のものたらしめ，人性・社会に関するわれわれの知識に永遠の貢献を与えたのは彼の統計ではなくて，むしろ各職業階級の営みつゝある現実生活，すなわちかれらの生活・労働を支持している諸々の条件，かれらの情熱，娯楽，家庭悲劇その他各階級がそれぞれ特有の危機に当面していかなる生活観を抱いたかに関する卓越した写実的描写であった」というのが事実であったらしい。

すなわち数量的統計的調査法は，客観的に，そして社会的諸条件の側から，状況を把握する長所をもっていた。それはたんにセンセーショナルな物語にすぎないたとおもえるような「聞き取り」の手法を乗り越える力をもっていたといえる。しかしながら，ブースの本意とは異なり，たとえば，ブースの調査を画期的ならしめたのは，この「聞き取り」から得たものであったという指摘もあることには注目しておく必要がある。

ライフヒストリーの科学への仲間入り　1918年に社会学史上ではたいへん有名なトーマスとズナニエッキによる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』が出版された。この著作は，しばしばライフヒストリー研究の出発点と位置づけされている。それはこの著作が，アメリカへのポーランド移民にまつわる生活記録をふんだんに含んでいたからである。なぜ当時の新傾向であった統計的調査法に軽々に走らないで，生活記録を重視したかというと，実際には右にみたような調査の歴史があったからであり，トーマスとズナニエッキはブースの業績評価を十分に検討した結果として，自分たちの調査法を選んだように推測される。

ただそれが，やはりあらたな出発点とされるのは，生活記録（ライフヒストリー）の長所を利用しながらも，その資料的限界を常に吟味しながら社会理論を打ち立てたことによるのだろう。トーマスとズナニエッキにはすでに，ブースにみられたような社会改良的な熱情はない。あえていえば，より科学的になり，より客観的になった，ということだろう。かれらは経験的な社会科学の確立を目的としてこの著作を著したと自身でも述べている。これは見方を変えれば，ライフヒストリーが科学の仲間入りをしたということかもしれない。

そのあたりの社会改良家への批判をトーマスとズナニエッキは次のようにいっている。

「社会改良者が物的環境の変化に過大な重要性をおいたり，個人や集団の精神状態や性格について物的条件からた易く結論を引きだしたりすることの中に，ある物的条件が与えられるとある種の傾向が自然に発達するという仮説が内在している。例えば，居住条件が良ければ家族生活がうまくいくとか，酒場がなければ飲酒をしなくなるとか，……などが仮定されている」しかし「物的条件の利用方法はそれを利用する人次第」である。「たとえば，ポーランドの農村では，それがアメリカでなら犯罪と貧困の温床とみなされるような条

件下で，申し分のない家庭生活を営むことができるのである」。

つまり社会的条件だけではなく，個人的条件をも等しく考慮しなければならないという主張である。この主張は，社会的条件の改良をめざしたブースなどの社会改良家と異なる見解といえよう。これがトーマスとズナニエッキが社会理論の“科学化”をねらいながらも，生活記録を重視するゆえんである。

シカゴ学派　ともかくも，かれらの影響のもとにショウの『ジャック・ローラー』などの著作をもつシカゴ学派が生れることになる。この学派の隆盛期は1920年代から1930年にかけてである。シカゴ学派はシカゴという都市での非行や犯罪，人種問題などを研究対象としたので，たしかに対象者の生い立ちを聴くライフヒストリーをひとつの有力な調査手法として採用できたろう。

ただシカゴ学派による調査法としてのライフヒストリーの使用はかなり短期間でおわる。その理由のひとつとして桜井厚は，その調査法が進歩しなかったからだと指摘している。すなわち「シカゴ学派に多用された生活史法もその方法論的な発展とは結びつかなかったために，1930年，ストゥファーらによって生活史法が質問紙法による統計処理以上の有効性をもたず，前者の方法が時間的にも労働的にも負担が大きく，利用には後者の方法がずっと便利である，と結論づけられた時その後の生活史法の衰退が暗示されたといってもよい」。本当に有効性をもたなかったのかどうかは，もちろん疑問の残るところであるが，当時は，量的統計的手法による“客観的”分析が，より有効と判断したわけである。

すくなくとも社会学では，この1930年代をさかいとして，ライフヒストリーは方法論的にはほとんどかえりみられなくなる。一言でいえば，非科学的であるからである。ただ個人と直接接することの多い人類学や民俗学では，たまに，すぐれたライフヒストリー的なモノグラフが紹介された。しかし，それを方法論的検討課題まで高めるほどには，研究者の関心を引かなかった。

ライフヒストリー論の再生　ところが1970年代に入って，ふたたびライフヒストリーへの関心がたかまる。日本の社会学では中野卓の『口述の生活史』が多くの研究者の注目をあつめた。それは岡山県の水島工業地帯に隣接する村に住むおばあさんの一生を聞き取ったものある。それは日本の庶民の近代を知るのに，そしてなによりも，明治・大正・昭和という日本近代を生きぬいた庶民の姿を知るのに最適の作品のひとつといえる。

だが，研究者たちがこの作品に注目したのは，内容もさることながら，時代背景として，研究者たちが社会科学の「科学」について，かなりマジメに再考をはじめた時期であったことによる。つまり，いままで営々と“科学化”をつづけていた社会科学が，本当の意味での社会科学であったのかという反省が起こりはじめていたのである。

そのようなときにライフヒストリーはかなり強いパンチを与える力をもっていたのである。それが，“非科学的”側面をもっていながら，強い魅力（あるいは思い切って“ある種の真実”といってよいかもしれないが）をもっている事実は，すでにわれわれがみたように，ブースの時代から証明されていたのである。

この中野卓をはじめ，米村昭二や居安正，前山隆，大山信義など，生活論的な実証研究に長年，従事してきた熟練の研究者が，ライフヒストリーについてのモノグラフを蓄積していった。その一方，それよりも若い世代である桜井厚や有末賢，水野節夫などが，ライフヒストリーの方法論について検討をはじめた。すでにライフヒストリーの歴史を概観してきたわれわれにとっては，容易に想像されることだが，この若い世代による「ライフヒストリーの方法論について検討」とは，ライフヒストリーが社会科学として有効であるということを証明することであった。すなわち，ライフヒストリーはかつて，科学としての有効性が問われ，その問に，十分に答えられないまま勢を無くしていった歴史をもつからである。

その意味では，“歴史は繰り返す”という格言が，ここでも生きているようにみえる。だが，シカゴ学派の時代と根本的に異なるのは，現在，科学自体が問われているということである。つまり，これが科学である，というような確固たる殻が科学になくなっている時代に，われわれは，す

でに突入しているのである。

この若い世代の代表者のライフヒストリー論のうち，本論の課題と直接関係する水野節夫の論考をつうじて，現在の社会科学の問題点を理解することにしよう。

ライフヒストリー論と社会学　水野はいままでのライフヒストリー研究にたいする批判をまとめて，それは三つあるといっている。

(1)ひとつが，ライフヒストリー研究の技法には，発展の跡がみられないか，あったとしても微少である，という批判である。(2)批判の第二は，ライフヒストリーは個人という個別なものを扱っているから，規則的な一般化——一般的社会法則の発見——が不可能であるというものである。(3)三番めの批判は，ライフヒストリー研究においては分析と解釈が不足しているというものである。

この三つの批判は確かに当っている。大なり小なり，指摘のとおりである。ただ，これらの批判は，私など科学を反省的にみる立場の者たちの科学観に照していえば，本当はどうでもよい批判である。しかし，水野は丁寧にこれら三つの批判について反論している。いわゆる科学方法論の性格を理解するために，ごく簡単にこの反論内容を紹介しておこう。

第一の，技法の発展性については，水野は，ライフヒストリーにおいては技法上の精緻化（客観性や正確さ，体系性を増すためのさまざまなくふう）が行なわれていると反論する。そして，そこに技法上の発展可能性がみられるとして，技法の精緻化の具体例をいくつかあげている。たとえば，殺人犯自身に自伝を書いてもらうだけでなく，専門家たちと殺人犯との間での数度に渡る話し合いをつうじて，別の共作の自伝を作成する。これらの自伝から「社会経済上の生活諸条件」や「自分についての描写と解釈」というようないくつかの主題をまとめあげる。その主題について，再度，本人と専門家との間で面接がおこなわれて問題点をあきらかにしていく，という手法などが，精緻化の一例である。

第二のライフヒストリーは個別なものを扱っているので，そこから規則的な一般化はできないという批判であった。たしかにライフヒストリーは，たった一人の人間を扱うことが多いので，そこからの一般化はむつかしい。

それにたいする反論として水野は＜脇固め＞というおもしろい表現をつかっている。すなわち，いままでのライフヒストリー研究の方法を分析してみると，三つの方法のいずれかで，この問題に対処しているという。

ひとつが，ライフヒストリーの対象とした人間と関係のふかい人たちに，その人の発言内容についてチェックしてもらう方法。ふたつめが，対象者と同じ属性をもった人びとについての情報を収集する方法。たとえば，非行少年スタンレーを対象としたショーは，かれと類似した非行少年たちの事例を，同時に紹介している。三つめの方法は，対象者の生きていた時代の社会状況や時代状況を示すことで，その対象者の位置をあきらかにする方法。これら三つをひっくるめて水野は＜脇固め＞と言っているのである。

その意味するところは，対象者の立っている客観的位置，まわりの状況を固めることによって，その客観性を増すところにある。さらにそれ以外に，たった一人ではなく，おなじ属性をもった人たちのライフヒストリーを，なるべく多く集める，という方法でも，個別性の問題からぬけだすことができる，と水野はいう。

第三の批判は，ライフヒストリー研究においては研究者の分析と解釈が不足しているというものであった。ライフヒストリーの作品のばあいは，そのライフヒストリーを示すだけで，解釈は読者にまかせるばあいが少なくないので，この批判もあたっている。それにたいする意見として水野は，つぎのようにいう。実際にあたってみると，研究者によって，個々の関心にもとづき，さまざまな分析枠組み（対象の切り取り方）がみられる。その結果として，多様な解釈がうまれているという。

この分析枠組みの多様性は，ライフヒストリーの対象とする人間の多様性と対応している。いわゆる科学的調査のばあいは，まず，仮説があり，その仮説の検証のために，実地の調査をおこなう手順をとる。その仮説そのものがその時点の科学者に共有されている疑問からでているばあいが多い。そのため，それほどの多様性を示さない。そ

れにたいし，ライフヒストリーのばあいは，生活についての研究者の最初の想定を裏切る事実が，話者によって語られ，それが貴重なことが多い。その結果，多様な，枠組みや解釈が成り立つ可能性がでてくるのである。

この枠組みと解釈については，イメージしにくいかもしれない。一例として，拙著『沖縄ハワイ移民一世の記録』では，最後の章で，初歩的な枠組みと解釈を提示している。参照願えればさいわいである。

主観と客観　上に紹介した水野の反論を十分に評価しながらも，違う立場から，ここで私見を述べようとおもう。かなり極端な，その意味では乱暴な，意見を述べることにする。その方が現在，社会科学がかかえている問題を赤裸々にできると考えるからである。

以上のことを振り返ってみると，そもそも，本質的に問われているのはなんだろうか。それは科学の客観性の問題ではないだろうか。すなわち，科学は客観的な事実を提示することで，科学たり得たわけである。科学は，超自然を否定することによって呪術と決別した。科学は善悪という倫理とみずからを区別することで，道徳と分れた。その区別の根拠は，つねに客観的事実であったのである。

客観的事実なくして，科学はない。客観的事実にもとづく合理的解釈が近代科学である。自然科学はこのような発想で，なんとか現在でも大きな破綻なくやってこれているようにおもう。それにたいし，人間や，人間がつくっている社会を研究対象とする社会科学においては，この方向を純粋に追及すると，本章の冒頭で問題とした＜人間離れ＞が生じはじめる。人間を対象としながら，人間離れとはどういうことか。

科学の目で見れば，個々の人間の考えというのは，主観なのである。だからそれを科学者が，どんなに自分の主観を交えずに記述しても，社会調査としては，一個の人間の主観（社会調査論のばあい，「個別的事実」と言い換えられるものである）が，詳しく提示されたものにすぎない。一方，複数の人間を作為性なしに選んで，その意見などをあきらかにしたら，社会調査としては，それは客観的事実（社会調査論のばあい，「一般的事実」と言い換えられるものである）なのである。

これはどういうことなんだろう。主観と客観という概念は，さまざまな概念規定とその概念をめぐる論争史をもつ。だが少なくとも，経験的社会学においては，あるいは社会調査という枠内においては，主観的事実と客観的事実（個別と一般）は対立して向い合っているものではない。ひとつの線上にある，程度の問題と私は考える。

もっと端的にいえば，人数の問題にすぎない。100人を基点として，1000人の方を向けば，1000人の意見は客観的（一般的）事実である。そして，10人の意見は主観的（個別的）事実である。もちろん社会調査にはさまざまな技法があり，この端的な事実を修正はできる。しかしそれはいわば小細工にしかすぎない。さきにみたように，ライフヒストリーが，個別的すぎて，一般法則が出せないと批判されたとき，脇固めの方法を水野が示していたが，これが修正法である。しかしながらたった一人という人数における主観（個別）の極点に位置するライフヒストリーが，個別性という批判を浴びるのは，まさに，人数によるものであり，いかに，修正案を蓄積しようとも，その修正案は，なんとも，うさんくさい印象を与えるのである。それは，この人数という端的な事実を乗り越えられないからである。それを10人にしても，100人にしても，1000人のまえでは，個別なのである。

なにゆえに社会科学は一般性を求めるのだろうか。それは，一般性こそがだれの目から見ても真であるという意味での客観的事実が示されていると，それこそ，一般に信じられているからである。けれども，いま見たように，主観的事実と客観的事実との関係は，二項対立するものではなく，線上にある相対的なものである。よって，ある観察された事象には，あえてこのような表現をつかえば，主観的事実と客観的事実が“共存”していることになる。しかも大切なことは，だれの目から見てもまちがいなく真実であるという保証はないけれども，特定の人から見れば真実である主観的事実が，しばしば不可欠な意味をもつ。たとえば，移民の問題を考える際に，ある一人の移民の語りのなかに，ときに決定的に重要な事実をかぎとる

ことがある。

しかし常識的には科学は一般性をもとめる。そこで，できるだけ多い人数を対象（母集団）とし，“できるだけ”と無理をするので，それを少ない人数と費用であきらかにする工夫が必要になってくる。社会調査の技術とは，ほとんどが，調査者の能力からすれば，大きすぎる母集団に属する全員を，詳しく調査するのを避けるための，労力削減のための技術である。もちろんそのような技術の発達はけっこうなことなのだけれども，そのような技術の発達イコール科学の進歩とはならないであろう。そのような単純な事実をも押えないで，返す刀で，ライフヒストリーは調査技術の発達がほとんどみられないからダメであるという批判は，本質を見誤っている。

また，ライフヒストリーのばあい，そのもののなかに，深みのある意見がでているので，あえて，研究者が小賢しい解釈をする必要がないばあいが多いのである。すなわち，ライフヒストリーに分析や解釈が不足しているという批判は，そのライフヒストリーがどのような経緯で作成されたか，という点を考慮に入れていないからかもしれない。

自分のライフヒストリーを語る話者は，透明人間に向って語っているのではなく，ある関心（価値観）をもって問いかけてくる調査者（研究者）に語っているのである。その意味で，語る側，語られる側の合作で，ライフヒストリーができあがる，と言って過言ではない。すなわち，ライフヒストリーそのもののなかに，分析や解釈に代わるものが含まれていることがある。そのばあいは，あえて別に，そのことについて論をたてる必要がないばあいがあるのである。

以上，ここではお名前を述べる余裕はないが，幾人かのライフヒストリーの研究者の意見を借りながら，私自身のライフヒストリーについての意見をのべてみた。冒頭にことわっておいたように，この覚書は本来は研究者を読者対象として述べたものではないので，あまりにもおおまかすぎる記述になっている面があることをお許しいただきたい。

また本稿の執筆後，庶民生活史研究会による『同時代人の生活史』（未来社）1989，など注目すべき研究も出ていることを書添えておきたい。

参考文献

有末　賢「生活研究とライフヒストリー」，川添登編『生活学へのアプローチ』ドメス出版，1984.
有末　賢「生活史と『生の記録』研究」『法学研究』61-1，慶応義塾大学法学研究会，1988.
Easthope,G A History of Social Research Methods 1974（川合隆男・霜野寿亮監訳『社会調査方法史』慶応通信，1982）
居安　正『ある保守政治家』御茶の水書房，1987.
桜井　厚「社会学における生活史研究」『南山短期大学紀要』10，1982.
桜井　厚「生活史の第一義的意味」『南山短期大学紀要』11，1983.
桜井　厚「主観的リアリティとしてのライフ・ヒストリー」『中京大学社会学部紀要』1-1，1986.
沢木耕太郎『テロルの決算』文芸春秋，1978.
前山　隆『ハワイの辛抱人』御茶の水書房，1986.
水野節夫「生活史研究とその多様な展開」宮島喬編『社会学の歴史的展開』サイエンス社，1986.
中野　卓『口述の生活史』御茶の水書房，1977.
大山信義『船の職場史』御茶の水書房，1988.
戸田貞三・甲田和衛『社会調査の方法』目黒書院，1949.
Thomas, W.I. and Znaniecki, F. The Polish Peasant in Europe and America 1918-1920（桜井厚訳『生活史の社会学』御茶の水書房，1983.）
内田義彦『作品としての社会科学』岩波書店，1981
米村昭二「芸北一山村の家族と親族」『北海道大学文学部紀要』30-2，1982.